

多文化が生きるまちづくり

～いちょう団地、多文化まちづくり工房の活動から～

多文化まちづくり工房代表 早川 秀樹

横浜市泉区から大和市にまたがる神奈川県営いちょう団地は、横浜側の「いちょう上飯田団地」48棟2,238戸、大和側の「いちょう下和田団地」31棟1,394戸が入居可能な大規模団地である。この団地の3,500世帯あまりの入居世帯のうち2割程度が外国籍世帯という多文化集住地域である。

大和市にインドシナ難民の定住促進センターがあったこともあり、ベトナムを中心にカンボジアやラオスの出身者が多く住んでおり、また、中国帰国者の関係者も多く住んでいる。その他にも日系の南米出身者なども住んでおり、他の集住地域に比べ、多言語・多文化な地域となっている。

昭和40年代に建てられた典型的な団地で、日本人住民は他の大規模団地と同様、少子高齢化が進んでおり、それと反比例するように、1990年代前半から徐々に、後半から2000年代にかけては急速に外国籍の若い世代の入居が増えてきた。

したがって、日本人住民と外国籍住民との世代や世帯構成人数は違いが大きく、現場での実感としては世帯比以上の多文化地域という印象を受ける。

例えば、いちょう団地内にあり、学区が団地内だけで構成される横浜市立いちょう小学校では、全校児童208名中114名が外国籍である。また外国にルーツのある児童も28名いるため、外国につながる児童の比率は約68%にもおよぶ(2011年4月現在)。

この傾向は年代が下がるほど強くなっており、現在も増え続ける外国籍の新規入居者や外国籍の若年世代の結婚および出生状況などを考えると、これからもこの傾向は続くだろうと思われる。

このような状況の中、地域住民は自治会を中心に積極的に多文化共生のまちづくりをしていこうという姿勢を持ってはいるものの、担い手である日本人住民の高齢化の中で、自治会運営自体が年々難しくなってきたり、年間行事なども少しずつ縮小してきているのが現状である。

多文化まちづくり工房は1994年に数名の学生で立ち上げた日本語教室を軸にして、この地域で活動を続けてきた。2000年からは、いちょう小学校の正門前に事務所を借り、「多様な文化背景を持った人たちが、それぞれの個性を出し合い、ともに楽しく暮らせる『まち』をつくる」を目的に、常に地域の状況や空気を感じ取りながら、その時々課題や可能性に対して活動を広げてきた。

現在の主な活動としては、日本語教室、子どもの教科補習や進学サポート、生活相談や多言語での情報作成などを中心に行っている。この他にも地域のお祭りやイベントに参画したり、地域内のネットワーク作りに関わっている。



夜の日本語教室には様々な国籍・世代の人々が多数集まる

私たちの活動の特徴の一つは、地域や地域に関わる様々な機関や団体と連携・協働する形を作ってきたことである。規模の小さい団体が、より大きな効果を得られる活動をしていくためには、多くの人たちの力を借りながら進めていく必要がある。

ると考えている。

例えば、小中学生の補習なら学校や図書館、大学などと連携し、日本語教室や生活相談なら自治会や警察、神奈川県などと連携するといったように、様々な機関や人と連携・協働しながら活動を行っている。

もう一つの特徴は、様々な活動の場を通してつながっている、地域で育った外国籍の若者が活動に主体的に参加していることである。

もともと支援者と受益者というよりも、同世代の若者同士といった関係性で、青年団のような集まりとも言える。そのような関係性だからこそ、大変なことも、みんなで一緒に楽しめるような、活動の場をつくることができているのだと思う。

これらの特徴が最も活きた取り組みとして、「TRYangels(トライエンジェルス)」という「多言語防災資料の作成」「多言語での防災指導」「災害現場での多言語広報」などを行っている、多言語防災チームの活動がある。



多くの地域の方たちに見守られてのTRYangels結成式

この取り組みは2006年に、消防署の担当の方と話す中で、まずは協力して多言語の防災パンフレットを作れないか、というところから話が始まった。

その年、当団体に関わる地域の外国籍の若者が翻訳を担当して作成した6言語併記の「防災パンフレット」を、翌年には「応急手当法リーフレット」をやはり6言語で作成した。

これらの事業は単に多言語の資料を作る、ということではなく、日本語教室や補習教室、サッカーなど、様々な活動の場を通してつながっている若者たちを、防災活動をきっかけに多文化・多言語な環境に対応でき、地域の中で活躍できる人材として育てることを目的とするものであった。

そのため、原稿を渡して翻訳を依頼する、という形ではなく、翻訳に関わらない若者も含めて、

「外国人防災リーダー」として、消防署の指導のもと、普通救命講習を受講したり、「横浜防災ライセンスリーダー講習会」に参加させてもらったりする中で、防災に対する知識とメンバーのつながりを深めていった。

そして、保育園や団地祭りなどのイベントなどでデモンストレーションを行うことで、活躍の場も広がり、地域内での認知度も少しずつ高まっていった。

2010年には、より若者が関わりやすいように「外国人防災リーダー」という名称から「TRYangels(=Tabunka多文化、Rescueレスキュー、Youthユース、angelsエンジェルス)」と改称した。同時に、次の世代を育てるため、地域の中学校とも協力し、中学生からのメンバーを募った。

最近では地域の中でもTRYangelsの活動が浸透してきており、自治会から依頼を受けて防災訓練等にも参加するなど、地域活動の中心を担う存在にもなってきた。

また、実際の災害現場での活動も行っており、地域での硫化水素発生事故現場では、消防署と連携し、外国籍住民の避難誘導を行った。また、東日本大震災の際には、多言語での安否確認や避難誘導、避難場所での対応などを行った。この時には外国籍住民への対応だけでなく、高



消防署や自治会の協力のもと、放水訓練も担当

層階に住む日本人住民の車イスの運搬など、地域の一担い手としても活動することができた。

現在、TRYangelsには、中学生から社会人まで、様々な国籍のメンバーが参加している。メンバー数は36名であるが、みんな特別に防災への意識、地域への意識が高いというわけではない。ただ仲間たちと共に、自分の力を生かして人のために何かをしたい、という思いで、活動に参加している。

この地域に住む人たちは、言語や国籍は様々だが、同じ時間、同じ空間を共有する仲間である。多文化まちづくり工房は、これからも彼らの思いを活かしたまちづくりを支えていきたいと思う。